第11講座 古文

1 次の古文を読んで、あとの問いに答えなさい。

猪の子あまた居たる中に、ある猪の子、「*1総の司とならん。」と思ひて、目をいからし、尾を振つてとびめぐる。しかれども、*2傍輩らこれを敬はず。「さらば。」と思ひて、羊の並み居たる中に行きて、①前のごとく振る舞ひければ、羊恐れて逃げ隠れぬ。さてこの猪望みを達して居たるところに、狼一匹走り来たりけり。「あはや。」とは思へども、「我は司なれば、②かれも定めて恐れん。」と思ひて居たるところに、狼とびかかり、耳をくはへて山中に至りぬ。□助けず。をめき叫び行くほどに、かの猪の傍輩この声を聞きつけて、つひに力を合はせて助けにけり。されば、もとの猪らに③謝りけり。

（『伊曾保物語』）

＊1総の司＝総司令官。総大将。　＊2傍輩＝仲間。

問一 〰〰線a「敬はず」、b「をめき」を現代かなづかいに直し、すべてひらがなで書きなさい。

a（　　）　b（　　）

問二 ——線①「前のごとく振る舞ひければ」とありますが、どう振る舞ったのですか。それが書かれている部分を古文中から十七字で書き抜きなさい。

問三 ——線②「かれも定めて恐れん」について、次の(1)・(2)に答えなさい。

(1) 「かれ」とは、だれ（何）のことですか。古文中から書き抜きなさい。（　　）

(2) 「定めて恐れん」の現代語訳として最も適当なものを次のうちから選び、記号で答えなさい。

ア きっと恐れるだろう。
イ 少しは恐れるだろう。
ウ 決して恐れることはない。
エ もしかしたら恐れるかもしれない。

（　　）

問四 □にあてはまる言葉として最も適当なものを次のうちから選び、記号で答えなさい。

ア 猪の子　イ 猪の傍輩
ウ 羊　エ 狼

（　　）

問五 ——線③「謝りけり」とありますが、なぜ猪の子は謝ったのですか。最も適当なものを次のうちから選び、記号で答えなさい。

ア 自分が最も強いと思っていたのに、狼のほうが強かったから。
イ 自分は猪の総大将なのに、仲間の猪を助けられなかったから。
ウ 羊の総大将にしてもらったのに、羊たちを救えなかったから。
エ 自分が思い上がった態度を取ったにもかかわらず、仲間の猪たちが助けてくれたから。

（　　）

2 次の古文を読んで、あとの問いに答えなさい。

昔、山越の里に老人ありけるが、年ごとに老いて、a〜〜〜〜〜〜〜〜①いみじう重き病に臥し、②頼み少なくなりけるに、ただ、この谷の桜に先立ちて、花をも見ずして死なんことのみを嘆きて、「いまひとたび花を見て死なば、うき世に思ひ残すこともあらじ」など、b〜〜〜〜〜〜③*1せちに聞こえければ、④その子悲しみ嘆きて、この桜の木の下に行きて、「なにとぞ、わが父の死にたまはざる前に花を咲かせたまはれ」と心をつくして⑤天地に祈り願ひけるに、その孝心、*2鬼神も感じたまひけん。一夜の間に花咲き乱れ、あたかも三月の頃のごとくなりける。この祈りける日、正月十六日なりけるとぞ。

（橘南谿『西遊記』）

＊1せちに聞こえければ＝ひたすら言うので。

＊2鬼神＝天地万物の霊魂や神々。

問一 〜〜〜線a「そのうへ」、b「思ひ残す」を現代かなづかいに直し、すべてひらがなで書きなさい。

a（　　）　b（　　）

問二 ――線①「いみじう」の意味として最も適当なものを次のうちから選び、記号で答えなさい。

ア ひどく　**イ** 悲しく

ウ 情けなく　**エ** すばらしく

（　　）

問三 ――線②「頼み少なくなりける」とは、どういうことですか。最も適当なものを次のうちから選び、記号で答えなさい。

ア お金が少なくなってしまったということ。

イ 診てくれる医者もいなくなったということ。

ウ 働くことができなくなったということ。

エ 病気が治る見込みが少なくなったということ。

（　　）

問四 ――線③「せちに聞こえければ」について、次の(1)・(2)に答えなさい。

(1) だれが、だれに言ったのですか。

（　　）が（　　）に。

(2) どんなことを言ったのですか。言った言葉を古文中から探し、それを現代語に直して書きなさい。

（　　）

問五 ――線④「その子悲しみ嘆きて」の部分で省略されている言葉は何ですか。ひらがな一字で書きなさい。

（　　）

問六 ――線⑤「天地に祈り願ひける」とありますが、子供はなぜ天地に祈ったのですか。次の□a〜cにあてはまる言葉を、aは二字、b・cは一字でそれぞれ書きなさい。

この時はまだ□aで、□bが咲くまでには間があり、それまで父親の□cはもたないだろうと思われたから。

a（　　）　b（　　）　c（　　）

問七 この文章の主題を端的に表している言葉を、古文中から二字で書き抜きなさい。

（　　）

練習問題

1 次の古文を読んで、あとの問いに答えなさい。

近き頃名人と称し、*1*2公より紫調賜はりし*3新九郎こと、権九郎と言ひし頃、日々鼓を出精しけれども*4いまだ心に落ちざる折から、年久しく召し使ひし老女朝々茶など持ち来たりて権九郎へ給仕しけるが、ある時申しけるは、①主人の鼓もはなはだ上達の由申しければ、権九郎もをかしきことに思ひて、女のこと常に鼓は聞けど手馴れしことにもあらず、我が職*5*6分の上達を知るわけを②尋ね笑ひければ、③老女答へて、*7*8我乱舞のこと知るべきやうなし。しかしながら*9親新九郎鼓を数年聞きけるに、朝々*10煎ける茶釜へ音ごとに響き聞こえ侍る。これまで権九郎鼓はそのことこれなきところ、この四、五日は鼓の音ごとに茶釜へ響きけるゆゑ、さてこそ上達を知り侍ると答へけるとなり。年久しく耳馴るれば自然と微妙に、よし悪しも分かるものと、権九郎も感じけるとなり。（根岸鎮衛『耳嚢』）

＊1公＝幕府。
＊2紫調＝調は音の調子を整えるために鼓につけてあるひものことで、紫は高い格式を表す色である。
＊3新九郎＝能の小鼓を受け持つ観世座の新九郎のことで、代々、この名前を受け継いでいく。
＊4出精＝精を出して励むこと。
＊5心に落ちざる＝満足できない。
＊6朝々＝毎朝。　＊7職分＝鼓の技。　＊8乱舞＝能。
＊9親新九郎鼓＝親である、前の代の新九郎の鼓。
＊10煎ける＝お湯をわかす。

問一 〜〜〜線a「言ひし」、b「をかしき」を現代かなづかいに直し、すべてひらがなで書きなさい。

a（　　）　b（　　）

問二 ——線①「主人」とは、だれのことですか。古文中から書き抜きなさい。

（　　）

問三 ——線②「尋ね笑ひければ」とありますが、権九郎はなぜ笑ったのですか。最も適当なものを次のうちから選び、記号で答えなさい。

ア　上達していないと思っていた自分の鼓の音を老女がほめてくれてうれしかったから。
イ　鼓の下手な老女が鼓の上達法を知っていると言ったのを滑稽に思ったから。
ウ　鼓の価値を知らないはずの老女が主人の持つ鼓をほめたのが不思議だったから。
エ　鼓を稽古したことのない老女が鼓の上達について言及したのがおかしかったから。

（　　）

問四 ——線③「老女答へて」とありますが、老女が語った内容を古文中から探し、その初めと終わりの四字を書き抜きなさい。

（　　）〜（　　）

問五　═══線部「我が職分の上達を知るわけ」について、Aさんは理解を深めたいと思い、次のような〔ノート〕にまとめました。これを読んで、あとの(1)～(5)に答えなさい。

〔ノート〕

権九郎の鼓の技の上達を知った出来事

（老女の話）

○前の代の新九郎の鼓の音は、毎朝「［　Ⅰ　］」。

○権九郎の鼓の音

これまでそのこと（＝「［　Ⅰ　］」こと）はなかった。

↓

しかし、「［　Ⅱ　］」は、「鼓の音ごとに茶釜へ響きける」（＝「［　Ⅰ　］」）。

↓

このことで「［　Ⅲ　］」と答えた。

（権九郎）

○老女の話を聞いて、［　Ⅳ　］と感心した。

古文を読んで気づいたこと・感想

権九郎と老女の話は、［　Ⅴ　］ということわざに似ていると思った。

(1)　［　Ⅰ　］にあてはまる言葉を古文中から十七字で書き抜きなさい。

(2)　［　Ⅱ　］にあてはまる言葉を、古文中から六字で書き抜きなさい。

(3)　［　Ⅲ　］にあてはまる言葉を、古文中から七字で書き抜きなさい。

(4)　［　Ⅳ　］にあてはまる言葉として最も適当なものを次のうちから選び、記号で答えなさい。

ア　長年その家に仕えている者は、当代の主人よりも物事がよくわかっているものだ

イ　第三者の方が当事者よりも、かえって物事の良し悪しがよくわかるものだ

ウ　素人（しろうと）でも、長年接している物事については、その良し悪しがわかるようになるものだ

エ　年寄りというものは、長年の経験で物事の微妙（びみょう）な違（ちが）いまでわかってしまうものだ

（　　）

(5)　［　Ⅴ　］にあてはまる言葉として最も適当なものを次のうちから選び、記号で答えなさい。

ア　門前の小僧（こぞう）習わぬ経（きょう）を読む

イ　馬の耳に念仏

ウ　一を聞いて十を知る

エ　他山の石

（　　）